

## 平成23年度 栖吉小学校校内研修計画

学びの教育部

## 1 研究主題

## 認め合い、高め合う子どもの育成

## 2 研究主題設定の意図

## (1) これまでの教育活動の取組から

昨年度まで、研究主題を「『わかる』『できる』『楽しい』授業を目指して」とし、授業実践を中心に研修を進めてきた。職員それぞれの専門性を生かし、自身の問題意識をもとに教科・教育活動を選定し、研究主題に迫る授業を構想・展開してきたのである。

授業公開後の協議会では、それぞれの取組から、研究主題に迫る各教科・教育活動の構想の在り方だけではなく、子どものよい姿について語られた。子どもの姿を基に話し合うことを通して、このような子どもをはぐくみたいという意識が生まれてきている。また、実際の子どもの様子が、思いやりをもって友だちに接したり、自ら学ぼうと意欲的に学習に取り組もうとしたりする様子がうかがえる。

しかし、共通の目標である研究主題が、教師の指導技術や子どもの学習の到達度に目を向けてしまいがちなことや、子どもをみる視点が明確でなかったことから、栖吉小学校として目指す子どもの具体的な姿の共通性などが明確になっていないことも事実である。授業実践研究は、学校の教育目標に掲げられている子どもの姿の具現を目指し、具体的な実践を通して子どもをみることを通して、教師の指導力向上を図るものでありたい。なぜならば、学校の使命は子どもをよりよくはぐくむことだからである。

したがって、これまでの取組を振り返り、栖吉小学校で大切にすることの学びを見出していく為にも、子どもをみる共通の視点となる研究主題を立ち上げていく必要がある。

## (2) 今年度の学校経営方針から

今年度の学校経営方針において、教育目標達成のための基本方針として、「人権尊重を基盤とし、子ども一人一人の個性や能力を生かし、どの子どものばす教育を進める」ことが示された。そして、基本方策として三点示されている。そこに、当校で目指す子どもの具体的な姿を見ることができる。

「**学ぶ意欲**を高め、確かな学力の定着を図る教育を進める。」

「**相手を思いやり、共に生きる豊かな社会性や人間性**をはぐくむ教育を進める。」

「**自分を大切にし、少々の困難にはくじけない、たくましい心**と体を育てる教育を進める。」

これらの子どもの姿は、自分自身の存在とその価値をしっかりと受け入れ、よりよいものを目指そうとする心や、他者の存在とその価値をも受け止めようとし、互いに高め合おうとする心によって突き動かされている姿といえる。このような子どもを具現していく為には、子ども自らが高まる

うとする意識を強くもつ必要がある。つまり、自己を受け入れ、主体的に自己の高まりを目指す意識を高めていく子どもをはぐくんでいくことが求められているのである。

### (3) 社会の要請から

近年、子どもの自己肯定感や、自尊感情を涵養する必要性が叫ばれている。将来への見通しや自己有用感を高く保つことが出来ず、社会参画しようとする意欲が高まらない人々が増えていることが問題となっているからである。新学習指導要領では、言語活動の充実が叫ばれている。これは、単に子どもの思考力を高める為だけではなく、他者とともに考えを交わすことによって新たな見方や考え方を得ることができるといったよさを実感させ、主体的に社会参画していこうとする意識の高まりをもねらっている。道徳の時間においては、自分自身を見つめることが中学年の価値項目の内容としてあげられた。これらのことから、現在の社会において自己を見つめ、他者とともによりよい物を生み出そうとする意識を高める教育が求められていると言えよう。

以上のことから、今年度研究主題を「**認め合い、高め合う子どもの育成**」とし、子どもが認め合い、高まっていく姿とはどういう姿なのかを探っていく。

子どもが他者と向き合い、その存在を認めていく為には、自分自身と他者を比較する必要がある。その時、自分の存在が確かなものになっていなければ、他者をうらやましく思ったり、自分には出来ないというマイナスの思考のみがはたらいたりしてしまい、自らを高めようという思考に到達することはできない。学習内容に対して主体的に取り組み、自分の考えをもつこと。その上で他者と考えを交わすような状況の中で、子どもがよりよい自分を求めようとしていく姿をとらえ、支援していくことが大切になっていく。

このような子どもの心を耕し、ともに認め合い、高め合うことを意識した指導による学びが、「栖吉の学び」となる可能性を秘めているのである。子どもが自己を見つめることや、他者を認め、考えを生かしながらよりよいものを求めていくことが出来る教育活動の在り方を探っていく必要があるのである。

## 2 研究の方向

今年度は、互いに認め、高め合う子どもの姿を集積・整理し、子どもの心を耕すことがどういうことかについて、共通理解を図るとともに、よりよい授業のあり方について議論し、深めていく。また、子どもの主体的な活動を保障する生活科・総合的な学習の時間の各学年の取組について共通理解を図るとともに、よりよい活動を目指し、構想を問い直していく。

## 3 研究の内容

研究主題に迫る為、以下の点を研究内容として取り組んでいく。

- (1) 子どもが認め合い、高め合うことを中心に、各教科・教育活動を構想・展開する。
- (2) 子どもが自分を見つめ、主体的に活動することができる生活科・総合的な学習の時間の年間構想を検証・作成する。
- (3) 子どもの認め合いを保障する、学びのガイドブックを作成・運用する。

(4) 外部との連携により、子どもの学力の向上や職員の資質能力の向上を図る。

#### 4 研究の方法

##### (1) 授業研究

###### ① 認め合い、高め合うことを中核とした各教科・教育活動における授業の構想・展開

各職員が、研究主題のとらえから、自身の専門性や問題意識をもとに構想する各教科・教育活動について、授業公開と振り返りレポートの作成、研究協議を行う。

授業公開については、学級担任は全員公開とする。授業公開を行う教科・教育活動については、各職員の考えをもとに決定していく。

また、グループを低・中・高学年を縦に分けて形成する。子どもの発達による活動の質の違いや、活動の可能性について子どもの姿で協議することで、職員全員で、当校の各職員の取組をとらえるとともに、学校全体の方向性を共通理解することが出来るようにしていく。

###### ○授業研究グループ

A グループ	篠原、小池、五十嵐、小林、桑原、西岡
B グループ	山崎、中村、高橋、西本、木戸、佐々木
C グループ	鈴木、石塚、田村、木本、鎌倉、上野、石津

初任者研修や教職12年経験者研修を、可能な限り校内研修の一環として位置付け、研究主題を受けた授業を構想・展開することで、研究に対する外部の意見も取り入れていく。

###### ② 振り返りレポート作成

授業者は、自身の構想や展開を子どもの姿から振り返り、研究主題に迫る子どもとはどういった子どもであるかをレポートする。分量はA4とする。振り返りレポートは協議会後速やかに作成し、全職員に配布する。参観者は、授業でみられた子どもの姿をもとに、研究主題に迫るために発揮させたい子どもの資質・能力や、有効な手立てについて気付いたことを付箋に記入する。このような取組により、栖吉小学校の目指す子どもの学びについて探っていくとともに、職員の子どものみる目や、指導観・理論の構築を図っていく。

###### ③ 協議会の開催

授業後、各グループによる協議会を開催し、子どもの姿をもと活動の在り方や今後はぐくみたい子どもの姿について協議することを通して、研究主題に迫る。学びの教育部を中心に協議を進め、輪番で記録を行う。

##### (2) 生活科及び総合的な学習の時間年間活動構想の検証・作成

① 生活科及び総合的な学習の時間において、子どもの主体的な活動が保証され、子どもの思考に沿った活動が構想・展開されているかを検証していく。具体的には、活動における子どもの姿を集積・分析し、学年内で話し合うことで、活動の有効性について考察・蓄積していく。その際、よいと思われる子どもの姿、活動の具体が分かる写真を記録していく。

② 各種研究会や研修会における生活科・総合的な学習の時間に関する情報を学びの教育部から提供し、それらと各学年の取組とを比較しながら、よりよい活動を構想していく。

③ 冬季休業から年度末にかけ、次年度の生活科・総合的な学習の時間の在り方について、検討

を行うとともに、具体的な年間活動構想を作成していく。

(3) 学びのガイドブックの作成・運用について

- ① 子どもの認め合いを保証するために必要な、学習のルールや規律について指導内容を精査し、共通に指導すべき内容を学びのガイドブックとして示す。
- ② 今年度は、校内試用を開始し、職員と児童との共通理解を図っていく。また、Ⅲ期前半に全体の取組の状況や効果について協議し、次年度の完全実施を目指す。
- ③ 学びのガイドブックに示した内容について評価する欄を作成し、子ども自身が意識して取り組むことができるようにする。

(4) 外部連携による研究推進について

① 学力向上推進システムの効果的な運用

新潟県教育委員会による学力向上推進システムを活用し、子どもの学力の定着状況を把握するとともに、学習内容のさらなる定着に結びつけていく。

② 外部機関への情報発信

ホームページを活用し、当校の研究と、各学年・学級での取組を発信していく。

③ 各種論文への積極的な応募

自身の取組を、子どもの姿をもとに整理し、実践研究論文の形にまとめることで、取り組みの意味や価値がより明確になる。さらに、外部機関の評価を受けることにより、多様な目で実践を考察することができ、教育理論や実践力の向上につながる。以上のことから、各種論文への積極的な応募を促す。

○論文の応募先例

長岡市教育委員会 教育実践論文

上越教育大学学教センター 教育実践研究論文

④ その他、各種研修への取組

各種教育に関する要請研修、研究推進上必要な研修等について、計画的に取り上げ、実施していく。また、長岡市教育センター主催の研修会への積極的な参加を促していく。

## 5 校内研修予定

月	授業研究	構想検証	ガイド作成・運用	学力向上推進システム運用	その他	
4	校内研修計画立案					
	グループ内授業日程調整	年間構想検討			市教研総会 各種部会	
5	授業研究・協議開始	○学びの教育部より、生活科・総合的な学習の時間に関する情報提供 活動の記録を共有・蓄積する。 ○生活科・総合的な学習の時間について、各学年の取組の有効性、	学びのガイドブック(仮) 試案作成・協議	5/2 配信、5/16 入力、 5/24 サポート配信	研究に関する HP 立ち上げ 長岡市教委論文 申込～5/30	
6			校内試用開始	6/1 配信、6/13 入力、 6/22 サポート配信		
7				7/1 配信、7/11 入力、 7/20 サポート配信		
8						
9				9/1 配信、9/13 入力、 9/22 サポート配信		
10				10/3 配信、10/12 入力、 10/21 サポート配信	上越教育大学学教 センター論文	
11				11/1 配信、11/11 入力、 11/22 サポート配信	長岡市教委論文 11/1～11/11	
12	成果と課題検討			12/1 配信、12/12 入力、 12/20 サポート配信		
1	研究紀要作成開始		H24 年間活動構想案 形式提案・作成開始	振り返り・修正	1/4 配信、1/16 入力、 1/24 サポート配信	
2	研究紀要完成				2/1 配信、2/13 入力、 2/21 サポート配信	
3			H24 年間活動構想案 完成	新年度配付用作成	3/1 配信、3/9 入力、 3/19 サポート配信	
	研究紀要・次年度校内研修計画作成					

### ※学びの教育部内役割分担

授業研究グループリーダー	A：篠原、B：山崎、C：鈴木
学力向上システム運用	西岡、(小須田)
論文執筆者とりまとめ・集約	上野
研究関係HP作成	鈴木(佐々木)